

乳児期の母子観察から考える子育て支援

—母親の内なる子どもイメージと家族のあり方への思い—

14012PCM 春木 万里

I. 問題

1. 子育て支援における課題の深刻化と多様化

少子化と核家族化, 都市化が進行するなかで, 子育て中の母親の地域での孤立化は, 現代日本の社会構造が抱える最大の課題の 1 つである (原田, 1991)。戦後の工業化社会の孤立した家庭には, 児童虐待は今後も増加しやすいが, とくに乳児では, 生命のリスクと重篤な精神病理の萌芽につながり易い (渡辺, 2000)。これからの子育て支援は母子関係を対象にするだけでなく, 家族全体さらに地域の中での生活全般が絡む課題であるといえる。

2. 世代間伝達

Lebovici (1988) によると, 現実の乳児 (real baby) は, 幻想の乳児 (fantasmatic baby) と空想的な乳児 (imaginary baby) を誘発するとした。幻想の乳児とは, 母親自身が赤ん坊だった時の無意識の記憶である。空想の乳児とは, 母親自身が小さいときから「いつかこんな子どもがほしいな」と空想してきた乳児である。母親にとって乳児の存在は, 母親自身の中に抑圧された未解決の心の葛藤を刺激する。そして, 葛藤を刺激する乳児は, 母親を脅かす存在ともなりうる。Fraiberg (1980) はこのような現象を「赤ちゃん部屋のおばけ (a ghost in the nursery)」と呼んだ。

3. 母子観察による関係性の把握

乳幼児観察は, Bick (1964) が創始した精神分析の初期トレーニングの手法であったが, 近年になって研究法としての意義が見直されてきたものである。過去の観察事例から, 健全な社会生活をおくる母親においてもなお, 母子だけの孤立した時間のなかでは, 赤ちゃんの要求内容を理解する余裕がない, という実態があるといえる。その背景として, 母親の心の課題と子どもの存在による母子交流の相互作用が影響を

与えているということがわかる。

4. 親になるということ

柏木 (1995) によると, 日々子育てをしている母親は, 父親よりも成長感が高かったという。子どもは親を人として育て, 豊かにしてくれる存在であるといえよう。そして, そのような存在を慈しむことが困難になったこの社会を, 私たちは改めて考え直すべきではないだろうか。

II. 本研究の目的

本研究は, タビストック方式の乳幼児観察を参考にした母子観察や投影法, そして家族イメージ法を実施し, 現代の母子関係の特質と家族イメージについて検討することを目的とする。既に同様の観察事例が報告されているが, 今回の研究知見が付け加えられることにより, 現代の子育て支援に有効な手がかりを与えてくれるものと期待される。

III. 方法

研究協力者: 38 週で正常出産した母親と男児 A, 父親という 3 人家族であった。

母子観察: タビストック方式乳幼児観察を参考に生後 1 ヶ月半から 1 年間, 原則として週 1 回 1 時間の家庭訪問による自然観察を行った。観察対象の中心は乳児であり, 乳児の周りで生じる出来事を観察者の体験を含めて記憶にとどめ, 観察直後に記録した。

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査: 生後 3 ヶ月, 6 ヶ月, 9 ヶ月, 12 ヶ月に実施した。

母親へのインタビューと心理検査: インタビューとロールシャッハテストは母親のみ, バウムテストは両親に対して, 観察開始前と観察終了後に実施した。三つの家・家族成員布置テストは両親に対して観察開始前, 生後 3 ヶ月と 9 ヶ月と観察終了後に実施した。

IV. 結果と考察

1. A の発達プロフィール

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査の結果を図1に示した。1年間を通して、発語の著しい発達がみられた。Aは、懸命に発声し、受身的な周囲の反応を引きだそうとしていたことが窺える。一方で、言語理解の発達は全体的にゆっくりであり、発語と言語理解のアンバランスさが特徴的であるといえる。

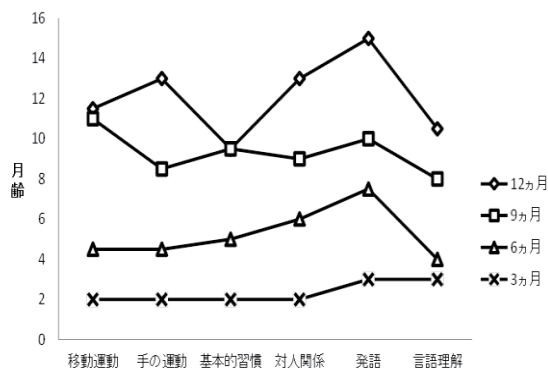


図1. 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査結果

2. 母子関係の特質

本事例の母親は、子どもからのメッセージに対する応答率が高かった。一方で、その応答内容は快的な側面に偏っており、Aの不快感を否認していたことが窺えた。また、情緒的な部分の汲みとりは少なく、操作的な傾向がみられた。

3. 両親の家族イメージ

当初、A家族は多くの人たちに囲まれており、両親の家族イメージは拡散していた。しかし、Aの成長と共に距離がとれ、凝集していく。観察終了後、母親は「父親・母親・Aが仲良くしていると他のみんなも仲良くできる」と語っている。両親にとってAの存在は、家族と社会を繋ぐ存在として受け入れられたのではなかろうか。「天使」であるAは、両親の家族イメージを変容させ、両親の家族イメージの再構築を促したといえよう。

4. 母親の中の子どもイメージ

母親は、インタビューにて「Aは自由にさせてあげたい」と語っていた。これは母親の「空想的な乳児」である。その一方で、母親はAの要求に対して操作的な側面があり、情緒的に甘えさせなかった。そのようなAの姿は、母親の「幻想的な乳児」であったと推察される。母親

の中の子どものイメージにはズレがあり、葛藤していたことが考えられる。

5. 母親としての自分と社会のなかの自分

本事例の母親は、子育て早期から父親や会社の手伝いをしてきた。母親には、子育てをしている「母親としての自己」だけでなく、「妻としての自己」、そして社会に関与していく「個人としての自己」が必要であったといえる。母親にとって、父親の会社は「母親としての自己」以外に、「妻としての自己」「個人としての自己」を確認することのできる重要な場であった。

6. 本事例から考えられる子育て支援

本事例の母親は、内省し、言語化する能力があった。それにより、内なる攻撃性を抑えることができていた。虐待などのリスクの高い家族に対して、過去の養育体験の内省を促し、言語化する機会を設けることは、葛藤の世代間伝達を断ち切るうえで必要であるといえる。

藤田(1994)によると、大人から子どもへの応答は自己有能感に繋がり、自信に繋がるという。社会全体が、子どもに対して応答的かわりが必要ともいえるであろう。また、Winnicott(1962)は、健康は情緒的成熟であるといい、子どもの情緒発達がいかに重要であるかを強調している。Cramer(1989)によると、乳児は依存的なやり方で母親の情緒状態に結びついていて、自分の内的な状態を母親の内的な状態に合わせて形づくるといふ。母親の情緒状態は、母子を取り巻く環境や社会状況によって大きく変化する。社会が変容していき、母親の育児不安は高まっていく一方である。原田(2006)は、現代の母親たちの承認欲求の強さについて言及している。本事例の母親は、Aに情緒的に甘えさせなかった。ここで、支援者は「子どもに甘えさせてあげなさい」と助言するよりも、個々の子育ての仕方を認め、受容することで、母親の安心を図っていくことが必要ではないだろうか。現代において、子どもたちが情緒的成熟に向かうためには、評価されることなく、両親が安心して子育てのできる受容的な環境、そして社会状況をつくる必要があるだろう。